

## 【春子夫人が着用した桂袴<sup>けいこ</sup>】

歴史公園えさし藤原の郷でロケが行われた「光る君へ」が佳境を迎えています。物語の行方はもちろんのこと、主人公である紫式部（まひろ）や宮中を行き交う女房たちのあでやかな装束も見どころの一つです。

当館にも、平安文化の伝統が残る装束として、明治から昭和初期にかけて皇族の行事の際に着用する『桂袴<sup>けいこ</sup>』が残っており、それが今回ご紹介する“イッピン”です。

桂袴<sup>けいこ</sup>とは明治17（1884）年に制定された女性の和装大礼服をいいます。公家女子の伝統的な正装である唐衣装（十二単）の略装で、皇族女子、および皇族以外の、いわゆる臣下の女子が着用した装束です。桂<sup>うちき</sup>、単<sup>ひとえ</sup>、小袖<sup>ほかま</sup>、切り袴<sup>ひ おうぎ</sup>からなり、檜扇<sup>ひ おうぎ</sup>を手を持ちます。新年拝賀に勅任官（天皇が任命する官吏）の夫人同伴が認められたことから、夫人服制として改めて桂袴<sup>けいこ</sup>が指定されたのです。

右下の写真は、大正4（1915）年の大正天皇即位大礼の時に實に同伴し桂袴<sup>けいこ</sup>を着用したお姿です。理髪は大垂髪（おすべらかし）、手にしている檜扇<sup>ひ おうぎ</sup>は板数38橋（枚）で扇面には竹と梅が描かれ、要<sup>かなめ</sup>には蝶鳥<sup>ちょうとり</sup>の金具がついています。なお、昭和3（1928）年昭和天皇即位大礼にも同様の桂袴<sup>けいこ</sup>を着用した記録が残されています。



《桂袴を着用した春子夫人》

桂<sup>うちき</sup>の表地は紫三重襷<sup>むらさきみえだすき</sup>地に酢漿<sup>かたぼみ</sup>と抱<sup>だ</sup>き東<sup>た</sup>蕨丸文<sup>たねわらび</sup>の二重織<sup>ふたえおりもの</sup>（酢漿<sup>かたぼみ</sup>と蕨<sup>わらび</sup>は齋藤家の家紋）、裏地は薄紫平絹<sup>うすむらさきひらぎぬ</sup>、中陪<sup>なかべ</sup>は浅葱平絹<sup>あさぎひらぎぬ</sup>。単<sup>ひとえ</sup>は紅梅<sup>こうばい</sup>幸<sup>こう</sup>菱文綾<sup>さいわいびしもんあや</sup>、小袖<sup>ほかま</sup>は羽二重<sup>はふたえ</sup>、切り袴<sup>べにせいごう</sup>は緋精好<sup>べにせいこう</sup>織<sup>おり</sup>の絹織物で仕立てられています。